

## 観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察

### (5) 瀬戸内海 ―藤井務旧蔵資料を中心にして―

#### **A Study of Sightseeing Areas in the Early Days of the Showa Era Through an Analysis of Tourism Pamphlets (5) Seto Inland Sea ―Focusing on the former collections of Tutomu Fujii―**

谷沢 明

TANIZAWA Akira

#### **Abstract**

This paper was written as a tourism culture study aimed at exploring the situation of sightseeing spots and the way of sightseeing in the early days of the Showa era. In this paper, we take up the topic of the Seto Inland Sea, and analyze tourism culture through tourism pamphlets. The main subjects are major scenic spots in the Seto Inland Sea route, tourist spots in Kagawa and Ehime prefectures, and Beppu Hot Spring in Oita prefecture. In 1912, Osaka Shosen Co. established a sightseeing route between Hanshin and Beppu, and brought the passenger Kurenaimaru ship(1,000 tons) into service. This can be seen as the beginning of the route mainly focusing on tourist transport in the Seto Inland Sea. Since then, sightseeing tours traveling around Shodoshima, Yashima, Kotohiragu Shrine, Miyajima, Dogo and Beppu Hot Spring and other places became popular. By analyzing the sightseeing brochure, we can know about the scenic spots of the Seto Inland Sea coastal area and the island in early Showa and the style of traveling around the hot springs.

#### **キーワード**

観光文化 touristic culture, 観光地 sightseeing area, 観光パンフレット  
tourism pamphlet

#### **はじめに**

本稿は、昭和初期における観光地の状況、観光の在り方を探ることを目的とする観光文化研究であり、「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察」(1)～(4)<sup>1</sup>に引き続いて執筆するものである。主資料とするのは、藤井務氏(1916～2003)<sup>2</sup>の旧蔵コレクションである昭和初期に発行された観光パンフレット類である。本稿に掲載する資料は、長女である安藤典子氏(月刊誌『旅』元副編集長)から著者が譲り受けたものの中の一部である。

これらの観光パンフレット類は、昭和初期の観光文化を知るうえで、旅行案内書『鉄道旅行

案内』、『日本案内記』、『旅程と費用概算』等の補完資料としてその存在は無視できない。前稿では、我が国有数の観光地である日光・箱根、富士・伊豆をはじめ、東京近郊の行楽・遊覧地、信越のスキー地を事例研究で取り上げ、観光パンフレットの解説を通して昭和初期の観光地の状況、旅客誘致の在り方、世相等についての考察を行った。これに引き続き本稿では、瀬戸内海の観光地に焦点を当てる。瀬戸内海の旅を特色づけるのは、船旅である。

## 1、瀬戸内海を巡る旅

### (1)『大阪商船株式会社航路案内』(明治36年)に見る瀬戸内海航路

瀬戸内海を巡る旅を考えるうえで、まず、瀬戸内海航路の概略を捉えておく必要がある。近代の瀬戸内海海運を担った主要なものに、大阪商船株式会社が挙げられる。明治17年、瀬戸内海航路の船主55名により設立された同社は、大阪・神戸（以下、阪神という）を起点に瀬戸内海をはじめ西日本航路の運航を担い、明治・大正期にかけて世界各地に航路を開いた。のちに商船三井・関西汽船となる同社は、横浜を起点に世界各地に至る航路を築いた日本郵船と並ぶ、我が国の二大船会社であった。

大阪商船が刊行した最も初期の航路案内書とされるものに『大阪商船株式会社航路案内』(明治36年)<sup>3</sup>があり、瀬戸内海航路をはじめ国内四航路<sup>4</sup>、国外五航路<sup>5</sup>の案内が掲載されている。大部な書物の約半分は広告が占めているが、案内記事として、発着・寄港する港町における支店又は荷客扱店、汽船碇泊場、交通、旅館料理店、物産名産、名所旧跡が記されている。この「名所旧跡」には観光案内的な記述が見られる点が注目される。同書に掲載された国内四航路の一つ瀬戸内海航路には、次の七航路がある〈表1〉。

〈表1〉『大阪商船株式会社航路案内』に見る瀬戸内海七航路の概要（明治36年）

航路	発着及び寄港地
大阪下関線	大阪を発し神戸、高松、多度津、鞆、尾道、糸崎、忠海、竹原、長浜、音戸、呉、宇品、宮島、岩国、久賀、柳井、室津、三田尻、門司を経て下関に至る。(毎日一回)
大阪細島線	大阪を発し神戸、高松、多度津、今治、三津浜、長浜、守江、日出、別府、大分、佐賀関、臼杵、佐伯、土々呂を経て細島に至る。(毎日一回)
大阪宇和島線	大阪を発し神戸、高松、多度津、今治、三津浜、長浜、守江、日出、別府、大分、佐賀関、八幡浜、吉田を経て宇和島に至る。(毎日一回)
宇品三津浜線	宇品を発し呉、音戸を経て三津浜に至る。(毎日二回)
玉島多度津線	玉島を発し直航多度津に至る。(毎日二回)
高松岡山線	高松を発し土ノ庄、犬島を経て岡山に至る。(毎日二回)
大阪高松線	大阪を発し兵庫、郡家、都志、湊、撫養、引田、白鳥、三本松、津田、志度を経て高松に至る。(毎日一回)

すでに江戸期以前から成立していた港町を含めて、山陽・四国・九州の浦々を結ぶ航路がきめ細かく巡らされていた様子を知ることができる。これらの航路は、観光利用というよりもむしろ、日常生活における物資の輸送や人々の往来に供するのが敷設の主目的であった、と考えられる。明治45年、大阪商船は阪神・別府間に観光航路を開設して一千トンの客船紅丸を就航させるが、これが観光客輸送に主眼をおいた航路の始まりと見てよいであろう。

しかしながら、同書の記述中に、瀬戸内海航路に使用する汽船は「軽快美麗なる汽船を撰へり」とあり、また、これらの汽船の中に最新式の堅牢美麗の「遊覧船」が含まれていることを謳っている。この観光航路開設以前に瀬戸内海の遊覧旅行に出かける人が出始めていたことを想起させる一文ではないか。

## (2)『瀬戸内海航路案内』(大正2年)に見る瀬戸内海廻遊旅行

本稿は、昭和初期の観光に焦点を当てているが、その基調をなすものとして大正期の瀬戸内海の船旅の様子を捉えておくことは重要である。大阪商船が阪神・別府間に観光航路を開設した翌年、同社は『瀬戸内海航路案内』(大正2年7月)<sup>6</sup>を刊行する。各寄港地における遊覧地案内を中心に、瀬戸内海花暦、海水浴場及び狩猟地案内、廻遊旅行の栞、営業案内等を掲載する本格的な旅行案内書である。同書の「瀬戸内の景趣」と題する冒頭文の一節を紹介する。<sup>7</sup>

「瀬戸内海の美は其多島の間を縫ひつつ島又島を望み或は岬角を廻りつつ海上より山野河川を眺むるにあり、故に之が絶勝に接せんには必汽船に搭ぜらるるを要す」

瀬戸内海の多島海の絶勝を眺めるには汽船に乗る必要がある、と船旅に誘う。そして同社は、多年瀬戸内海航路を経営し、優秀な汽船を配し、定期航路を持ち、探勝にも便利であることを強調するとともに、美麗な船の設備をこのように宣伝する。<sup>8</sup>

「本航路の汽船は何れも快速美麗に、運動場・浴室・電燈等の設備を完全にしひたすら乗心地よからんを期せるのみならず、旅情を慰むる為め新刊の雑誌・運動器具・蓄音機等を備付け尚種々の余興をも演ぜしむ」

船に雑誌・運動器具・蓄音機等を備えつけるばかりか、余興を催して乗船客を楽しませていた様子が見て取れる。そして、「此の船上にありて此の勝景を賞し始めて羽化登仙の思あるべきなり」と結ぶ。すなわち、快速美麗なる船に乗って瀬戸内の風景を愛でる旅は、天にも昇る心地がする、と言うのである。

同書巻末に掲載する「廻遊旅行の栞」は、名勝地巡遊客の便を図るために作成されたもので、大正初期の瀬戸内海の観光スポットを知るうえで参考になる。栞には10地域29コースが示されている。内訳は、畿内付近5、淡路島5、徳島・鳴門3、小豆島2、讃岐2、道後温泉付近1、別府温泉付近3、備後1、広島湾及び宮島5、関門付近2である。

畿内付近5コースは、大阪・神戸兵庫・京都・奈良・伊勢参宮であり、中国四国・九州方面からの旅客を想定して組み立てられたものと考えられる。淡路島5コースは、瀬戸内海航路大阪由良線及び大阪甲浦線利用客を念頭において作成されたものと思われる。徳島・鳴門3コー

スは、同大阪徳島線利用客を想定し、鳴門の渦潮観潮を念頭においている。瀬戸内海の名勝地が多く現われる小豆島～別府間の7地域16コースの記述内容を整理すると〈表2〉となる。

〈表2〉「廻遊旅行の栞」に見る名勝地巡遊（大正2年）

地域	記載内容
小豆島	【寒霞溪探勝】坂手に上陸し洞雲山隼山の霊跡を探り、寒霞溪表十二景裏七景を探り、内海湾の静波を賞し坂手に帰る。（一日） 【小豆島巡り】坂手に上陸し南沿岸（寒霞溪・清滝・花寿波・池田等の勝地あり）を経て土庄淵崎に出で付近の勝を探り、北海岸（伊喜末湾・大鐸の銚子滝・小部不動等あり）を経て福田に出で橋・苗羽を経坂手に帰る。（五日）
讃岐	【讃岐めぐり】早朝多度津に上陸して善通寺・琴平宮に参詣し、高松に出で栗林公園を見、屋島に源平の古戦場を弔ひ高松に帰る。（一日） 寒霞溪探勝を合せなす時は一日を加ふ。 【東讃めぐり】引田又は三本松に上陸して白鳥神社に詣で、津田の松原に遊び、志度寺に賽し、五剣山八栗寺に攀ち、壇の浦（牟礼）付近史跡を探り高松に出ず。（三日）
道後温泉 付近	【松山道後】高浜に上陸し伊予鉄道にて松山に到り市付近の名勝を探り道後温泉に浴し高浜に帰る。（二日）
別府温泉 付近	【別府入湯】朝別府に上陸して別府浜脇に亘る到处の温泉に浴し、其無尽蔵なるを見、観海寺に上り豊後湾の烟波渺々たるを賞し、大分に遊ぶ。（一日） 【温泉及地獄巡り】別府町の諸温泉を過ぎ観海寺に登臨し鉄輪に廻り、海地獄の奇を探り、柴石の湯滝に浴し、血の池地獄の凄壮を見、亀川に出づ。（一日） 【別府付近】別府温泉に浴し、温泉及地獄めぐりをなし、宇佐八幡に詣で、耶馬溪の奇勝を探る。（四日）
備後	【鞆・尾道】朝鞆に上陸し仙酔島・皇后島等の妙景を探り阿武菟観音に詣で引返して翌朝乗船し梶子瀬戸・尾道水道を縫ふて尾道に上陸し市付近の名勝を探る。（二日）
広島湾及 宮島	【広島湾】隠岐・音戸の瀬戸を抜け呉軍港の前を過ぎて吉浦に上陸し呉市に到り市及付近の勝を探りて宇品又は広島に出づ。（一日） 【厳島参詣】厳島神社に詣で、大元公園に遊び、紅葉谷の清流を賞し、千疊閣五重の塔を見市内を見物す。（半日） 【宮島御山登り】宮島に上陸し厳島神社に詣で御山に登り、下山して厳島付近の勝をめぐる。（二日） 【厳島めぐり】島めぐりをなす時は前二項に各一日を加ふ。 【宮島岩国めぐり】厳島神社に詣で付近の勝を探り岩国に到り錦帯橋を見公園に遊び、広島付近の勝をたづね宇品に出づ。（二日）
関門付近	【壇の浦付近】下関（又は門司）に上陸し赤間宮壇の浦等付近の勝地史跡を訪ひ、関門海峡を渡る。（一日） 【門司付近】門司（又は下関）に上陸し市付近の勝を探り関門海峡を渡る。（一日） 但大里・宮崎・博多・福岡に遊ぶ時は一日を加ふ。

これらの名勝地巡遊に当たり、大阪商船では、旅客誘致のために割引切符（往復割引、連絡割引、季節割引、団体割引、学校割引）を発売していた。往復割引について次の記載がある。<sup>9</sup>

「阪神及讃岐・伊予・中国・豊後各港間には四時割引切符を発売せるを以て寒霞溪・琴平・宮島の参詣・道後・別府の入湯・栗林公園・屋島古戦場の見物、大阪・神戸・京都・奈良其の他各地方面への御往来に極めて便なり」

瀬戸内海の阪神～豊後間を往復割引の対象とすることにより、上記名勝地への旅客誘致を促す。また、途中、高松・多度津・宇品・宮島に上陸の便を図った往復割引切符も発売された。連絡割引には、阪神・関門及び宇品高浜線と伊予鉄道の船車往復割引等があった。季節割引は遊覧の好期あるいは社寺の大祭等の催しの時に臨時になされるもので、寒霞溪探勝・琴平善通寺参詣・出雲大社参詣・瀬戸内海周遊・別府入湯・海水浴・狩猟等の割引が行われた。これらのことから、大正初期、すでに瀬戸内海を巡る遊覧旅行を促進する仕組みができあがっていたことを窺い知ることができる。

10 地域 29 コースに加えて、葉には次の「瀬戸内海周遊」(七日間)<sup>10</sup>が提示されている。

「阪神を出発地とすれば中国沿岸各景を船中に眺め宮島に上陸して厳島神社に詣で付近の名勝を探り、尾道別府線にて別府に到り温泉に浴し付近の温泉及地獄巡りをなし、高浜に渡りて松山市に入り、道後温泉に浴し、高浜に引返し多度津に転じ、善通寺・琴平に参詣して高松に出で、屋島・栗林に遊び高松より乗船す」

この記述により、日本三景の安芸の宮島、日本一の泉源数と湧出量を誇る別府温泉、日本三古湯の一つに数えられる道後温泉、弘法大師生誕地の善通寺、海上信仰の聖地として篤い信仰をうける金刀比羅宮、源平古戦場の屋島、高松藩主が築造した栗林公園が瀬戸内海における名だたる観光地であったことが浮かび上がってくる。

### (3)『旅程と費用概算』に見る瀬戸内海遊覧

大正から昭和初期にかけての瀬戸内海遊覧の旅は、『旅程と費用概算』にも紹介されている。まず、大正 9 年の「瀬戸内海遊覧」(東京起点八日間)<sup>11</sup>を紹介する。夜行列車で東京を発ち、翌朝神戸に到着。湊川神社、須磨ノ浦を見物し、船で高松に向かい宿泊。三日目、栗林公園、屋島壇ノ浦を見て、船で小豆島阪手に向かい宿泊。四日目、寒霞溪を見物。坂手から寒霞溪まで二里、人力車や自動車の便があった。五日目早朝、小豆島から船で高松に移動。旅館で一休みした後、汽車で移動して善通寺、金刀比羅宮に参り、多度津に宿泊。六日目、船で宮島に向かい宿泊。途中、鞆ノ浦、仙酔島、阿伏兎観音、尾道千光寺、音戸ノ瀬戸の風景を味わう。七日目に夜行列車で宮島を発ち、八日目の夜に東京に帰着する。

これにより、神戸の須磨ノ浦、讃岐の栗林公園・屋島壇ノ浦・小豆島寒霞溪・善通寺・金刀比羅宮、安芸の宮島、備後の鞆ノ浦・仙酔島・阿伏兎観音・尾道が大正中期の瀬戸内海における主な遊覧先であったことがわかる。

次いで昭和 5 年の「瀬戸内海名所巡り」(東京から十日間)<sup>12</sup>を紹介する。四日目の小豆島までは大正期の旅程と同じである。五日目早朝、小豆島から船で多度津に移動。金刀比羅宮に参った後に松山まで行き、伊予電鉄に乗り換えて道後に向かい宿泊。六日目、道後から高浜に移

動して宿泊。七日目早朝、高浜から船に乗り別府に向かい、地獄巡り等の別府遊覧をして宿泊。八日目、船で別府から宮島に移動して宿泊。九日目、宮島遊覧をして昼過ぎに汽車に乗って帰路につき、十日目の朝に帰着する。<sup>13</sup>

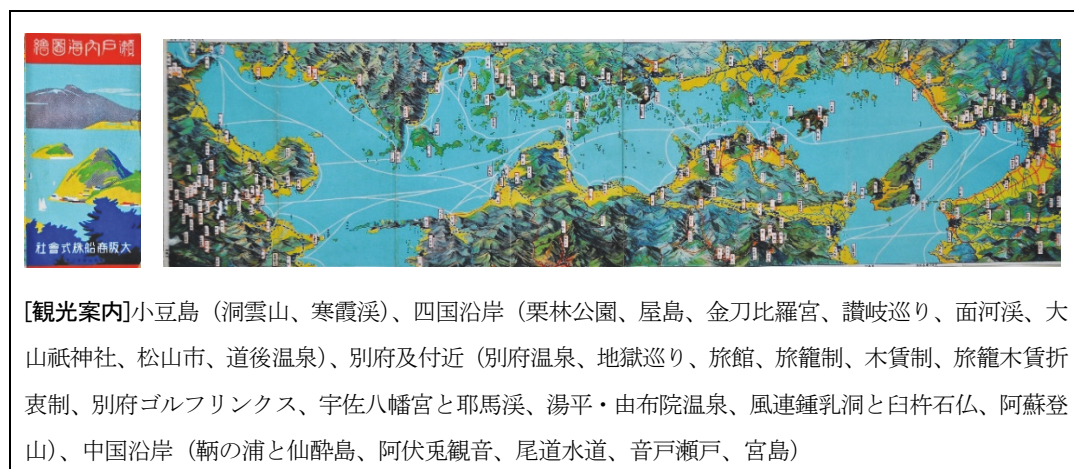
大正期の「瀬戸内海遊覧」に道後温泉及び別府温泉が加わったものが、昭和初期の「瀬戸内海名所巡り」であった。大阪商船発行の『瀬戸内海航路案内』（大正2年）とジャパン・ツーリスト・ビューロー発行の『旅程と費用概算』（昭和5年）を比較すると、瀬戸内海を巡る旅の行先は極めて共通性があることが確認できる。すなわち、瀬戸内海における観光地巡りの旅は大正期にすでに定型化していた、と捉えることができる。

## 2.昭和初期の瀬戸内海の旅

### (1)「瀬戸内海図絵」(大阪商船、昭和6年)

大阪商船発行(昭和6年11月)の「瀬戸内海図絵」〈資料1〉は、九折り17.5×8.8cmの絵地図で、昭和初期の瀬戸内海の航路及び観光名所を概観するのに好都合である。表紙は、瀬戸内海に浮かぶ小島のイメージ画、一面が瀬戸内海鳥瞰図、その裏面が瀬戸内海航路案内、沿岸の観光案内である。観光案内は、小豆島、四国沿岸、別府及付近、中国沿岸、と広域にわたる〈資料1参照〉。

〈資料1〉「瀬戸内海図絵」(大阪商船、昭和6年)



本文中に、写真20枚が掲載されている。寒霞溪・栗林公園・屋島・金刀比羅宮（香川県）、来島海峡・大山祇神社・道後温泉（愛媛県）、鞆の浦・阿伏兎観音・宮島（広島県）、錦帯橋（山口県）、別府全景・別府海岸砂湯・別府海地獄・耶馬溪（大分県）、阿蘇山（熊本県）の16枚と別府航路緑丸・董丸の4枚である。以上の写真から昭和初期の瀬戸内海を代表する観光名所が浮かび上がる。それらは、前述した大正初期の観光地とほぼ重なる。また、九州の阿蘇山や耶馬溪も瀬戸内海の船旅で向かう観光地になっていたことも見落とせない。

本パンフレットは、冒頭文「瀬戸内海」で、次のように瀬戸内海の船旅へ誘う。

「四季波穏で且其景色の秀麗なるは普く内外に知らる。船上より展望すれば茅渚の浦曲の白帆の群、須磨や舞子の白砂青松や淡路島の美しき眺めは古より詩歌に詠ぜられて居るところ」

波静かで穏やかな瀬戸内の風景に、茅渚の浦曲（大阪湾東南部、和泉国海浜の古称）に浮ぶ小舟の白帆のイメージを重ね合わせる。くわえて、兵庫から明石にかけて見られる須磨や舞子海岸の白砂青松、淡路島の眺めの美しさを讃える。次いで讃岐の描写である。

「奇勝寒霞溪に名高き小豆島の山容の凡ならざるを見るべく、将又源平合戦の昔を偲んで屋島、壇の浦に遊ばば、清風名月の夕など真に惻々として懷古の情を喚らるるものがあります。其他保元平治物語に悲しき白峰の山、金刀比羅宮の鎮座まします象頭山など讃岐には名所多く…」

小豆島の寒霞溪をはじめ、屋島、白峰、金刀比羅宮を讃岐名所として挙げる。白峰山には保元の乱により讃岐国に配流された崇徳上皇を祀る白峰宮があるが、今日、観光名所としての知名度は屋島、金刀比羅宮に比べて必ずしも高くはない。船は、伊予にさしかかる。

「伊予の沖の変化に富める多島海と瀬戸、其眺めは豪宕、中にも来島海峡の相迫る処は誠に山水の美鍾められて茲にありと思はしむるものがあります」

多くの島々が浮かぶ芸予諸島、中でも来島海峡の眺めは豪快、まさに自然美を集めたところだと思わせる、と叙述する。いよいよ、九州の別府である。

「豊後湾に至りては景趣雄大、鏡の如き水面に漁舟白帆の去来する眺めと、由布、鶴見、高崎の諸山半空に横たはり…」

由布岳・鶴見岳・高崎山を背にした豊後湾は、ヴェスヴィオ山を控えるナポリの風景に匹敵するとも言われている、と続けてその風景美を讃える。最後に、山陽沿岸の紹介となる。

「軻より宮島にかけて大小無数の島嶼が散在し、海は池の面よりも静に、陸と海と島と迫っては開け、展けては逼る所真に一幅有声の画であらねばなりませぬ」

鳥瞰図を見ると、軻の浦から宮島にかけて因島、大三島、大崎島、倉橋島、江田島をはじめ数多の島々が描かれ、波静かな瀬戸内海に浮かぶ島々はまるで絵のようである、と讃える。

本パンフレットには、大阪別府線をはじめ瀬戸内海六航路が記載されている。その概要を整理すると〈表 3〉の通りである。瀬戸内海航路の中心をなすのが昼晩の毎日二回出帆する大阪別府線である。<sup>14</sup>使用船舶は、菫丸・緑丸（ともに昭和3年進水）の新造船を目玉に、計五隻で航行していた。<sup>15</sup>阪神発下り昼便は、翌朝10時に別府に到着する。晩便は、東京発の超特急燕に神戸で接続するダイヤを組んでおり、別府到着は午後3時である。九州方面への旅行についてこのように利便性を説く。

「別府に御上陸、温泉に一浴後日豊線、豊肥線等により小倉、門司方面、宮崎、都城、鹿児島方面或は阿蘇、熊本方面に向へば其日の中に到着いたします」

〈表3〉「瀬戸内海図絵」に見る瀬戸内海六航路（昭和6年）

航路名称	概要
大阪別府線	阪神及び別府大分から昼晩の二回出帆。（中略）四国九州への往復には本航路を御利用下さい。省線主要駅で船車連絡切符を発売。（毎日二航海）
阪神高松 多度津線	大阪、神戸、高松、坂出、多度津間を連絡往復。両地共晩発翌早朝着。琴平参詣、栗林公園、屋島探勝や讃岐、東予方面の往来に便利。（毎日航海）
大阪山陽線	大阪神戸を発し小豆島、高松、多度津、鞆、尾道、糸崎、忠海、竹原、広島、阿賀、音戸、呉、宇品、宮島其他の山陽各港を経て門司、下関に到る航路。沿線の風光は内海中に冠絶。（毎日航海）
宇品宮島 別府線	中国より別府其他九州東海岸へ御旅行せらるる方、又は宮島見物後別府へ入湯せらるる方は便利。（水曜日を除き毎日航海）
大阪若松線	阪神より讃岐観音寺に直航北予各港を経て門司若松に往復するもので高浜、門司間は省線と連絡。（毎日航海）
宮島遊覧船	毎土曜日晚阪神発、日曜日午前宮島着、月曜日早朝阪神に帰着するものにて、宮島、錦帯橋見物に最も便利。（冬期休航）

昼便利用の場合、船から降りて別府で温泉に浸かり、それから汽車に乗り換えれば、鹿児島や熊本方面はその日のうちに着く、と宣伝する。日豊本線全通（大正12年）、豊肥本線全通（昭和3年）により、別府は九州への海の玄関口となったことがわかる。

一方、別府発上り昼便は、神戸に早朝着くため特急列車に乗り換えて帰京できた。また晩便は、翌朝高松に寄港する。そして、こんな一文を添える。

「御入浴の帰途或は御上阪の途中栗林公園、屋島、琴平等に御遊びになるのに御便利で、神戸で超特急燕に接続致します」

別府温泉の帰りに高松で下船して栗林公園、屋島、金刀比羅宮を見物することを勧めるのである。これは、九州から阪神に向かう列車利用ではできない旅であった。


大阪別府線は、日本三景の宮島は通らない。そのため宮島に行くには大阪山陽線の航路利用となる。これは、四国の多度津から対岸の鞆の浦に行き、それより尾道を経て山陽沿岸の多くの港町に寄港しつつ宮島へ向かい、門司、下関に至る航路である。芸予諸島の多島海美を鑑賞するのに好都合な航路であった。またそこは、昔から利用された歴史ある「地乗り航路」に当たり、中世に大いに栄えた港町の鞆の浦や尾道に寄港する航路であった。宮島へは、他に宇品宮島別府線もあった。また、週末に宮島遊覧船も出ており、宮島や岩国錦帯橋の見物客の便を図っていた。本パンフレットからは、昭和初期の船旅の様子がありありと目に浮かんでくる。



## (2)「遊覧日程と費用」(大阪商船、昭和 10 年)

大阪商船発行(昭和 10 年 4 月)の「遊覧日程と費用」(資料 2)は、「国立公園瀬戸内海周遊」をはじめ遊覧日程案 15 コースを掲載するパンフレットである。発行年は、わが国初の国立公園として、瀬戸内海国立公園が指定された翌年に当たる。15 コースは、瀬戸内海はもとより、別府起点の九州遊覧、同社の航路がある南紀の名所遊覧を含めて多岐にわたる。当時の船旅の様子が目に浮かぶパンフレットである。「瀬戸内海と紀州沿岸遊覧日程案」を整理したものが(資料 2)である。

〈資料 2〉「遊覧日程と費用」(大阪商船、昭和 10 年)

	
瀬戸内海	国立公園瀬戸内海周遊、讃岐名所めぐり、道後入湯、別府入湯、鞆遊覧、宮島別府遊覧
九州	耶馬溪遊覧、国立公園阿蘇遊覧、国立公園霧島・阿蘇及び別府遊覧、別府・阿蘇・雲仙・長崎・日田回遊、北九州・阿蘇・別府回遊
紀州	国立公園那智・瀨遊覧、串本・潮岬・大島探勝、白浜湯崎入湯、国立公園熊野めぐり

ここでは、瀬戸内海遊覧の 6 コースを紹介したい。まず、「国立公園瀬戸内海周遊」(七日間)を挙げる。夕方、阪神を発ち、翌日、船上から沿岸の名勝鞆の浦、阿伏兎観音堂、尾道水道、音戸瀬戸、呉軍港を眺め、夕方宮島に上陸して厳島神社に参詣して同夜再び乗船する。三日目の朝、別府に到着して入湯、地獄巡りをして一泊。四日目、別府航路の昼便に乗り、夕刻四国高浜に上陸して道後温泉に半泊。松山城、松山市内を見物して夜中に高浜より乗船。五日目の朝、高松に上陸。讃岐遊覧切符を求め、屋島、栗林公園を遊覧し、金刀比羅宮に参詣する。夕方、多度津より船に乗り、七日目早朝、阪神に帰着する。別府温泉に一泊、道後温泉に半泊するほかは、船中で寝泊まりしつつ移動する旅であった。当時、阪神—宮島—別府—阪神の瀬戸内海回遊券が発売されていた。

二つ目は、「讃岐名所めぐり」である。夜、阪神を発ち、翌朝、多度津に上陸して電車で琴平に向かい金刀比羅宮に参拝する。琴平から電車で高松に出て栗林公園を見物し、再び電車で屋島に行きケーブルカーで屋島に登る。高松に戻って夕食をとった後、夜中に高松から乗船し、

翌朝、阪神に帰着する。往復船賃・電車賃をセットにした定額1割引の讃岐遊覧券が発売されていた。

三つ目は、「道後入湯」である。夜、阪神を発ち、翌朝、四国の高浜に上陸して電車で道後に向かって入湯。松山城をはじめ松山市内の名所を巡り、夕方高浜から乗船し、翌朝、阪神に帰着する。

四つ目は、「別府入湯」である。昼便で阪神を発ち、翌朝、別府に上陸して入湯、地獄巡りをする。夕方、別府から乗船し、昼に阪神に帰着する。五か所の地獄見物料金をセットにした地獄巡りバス乗車券が発売されていた。

五つ目は、「鞆遊覧」である。夕方、阪神を発ち、翌朝、鞆の浦に上陸して仙酔島一帯の風景を賞し、歴史を探り、阿伏兎観音に遊ぶ。夕方、鞆の浦から乗船し、翌朝、阪神に帰着する。阿伏兎岬では五人乗りの遊覧機艇が運行していた。

六つ目は、「宮島別府遊覧」である。夕方、阪神を発ち、翌日は鞆の浦から音戸瀬戸にかけての芸予諸島の風景を船上から眺めつつ西に進む。午後、宮島に上陸して厳島神社に参詣し、同夜再び乗船する。三日目の朝、別府に到着して入湯、地獄巡りをする。夕方、別府から乗船し、昼に阪神に帰着する。前述した瀬戸内海回遊券利用の旅である。

この中で、讃岐名所めぐり、道後入湯、鞆遊覧は、阪神出発の場合は一日の休暇をはさんで前夜出発、二泊とも船中宿泊で、休暇の翌朝に帰着できる経済的かつ手ごろな旅であった。京阪神の都市住民にとって、瀬戸内海沿岸の名所旧跡は、恰好の遊覧場所であったことが本パンフレットから読み取れる。

### 3. 讃岐・伊予への旅

#### (1) 讃岐巡りと道後温泉へ

讃岐には金刀比羅宮をはじめ、屋島、栗林公園など全国的に知名度の高い名所がある。とりわけ金毘羅参りは、伊勢参宮とともに庶民の旅を代表するものとして名高く、江戸中期以降多くの人が金毘羅大権現に参詣する風が生まれた。<sup>16</sup>当時、四国へ渡るには船便を欠くことができなかった。この船便として「金毘羅参詣船」があり、大坂淀屋橋南詰など各所から出帆して金毘羅参りを盛んにした。<sup>17</sup>大坂のみならず瀬戸内海各所にも金毘羅へ向かう船便があり、山陽沿岸の主要な渡り口として岡山県下津井が賑わった。<sup>18</sup>

金毘羅信仰は、各地を遊行した「金毘羅道者」が金毘羅大権現のご神徳を説いたことにより津々浦々に広まりをみせた、という。また、『金毘羅道中膝栗毛』(十返舎一九・文化7年〈1810〉)や『金毘羅参詣名所図会』(暁鐘成・弘化4年〈1874〉)の刊行も、庶民の参詣への誘いとなったであろう。庶民は、仲間とともに「講」を組んで金毘羅へ参詣する風習があった。金毘羅参詣船が着いた四国の港は丸亀や多度津であった。文化3年(1806)、丸亀藩は金毘羅参詣船の碇泊所を整備するため福島湛甫の改修を行う。また、天保5年(1834)、多度津京極藩も港の浚渫を行う。これらのことは、金毘羅参りの客が引きも切らずに上陸したことを背景にしている、

と見て差し支えない。

明治の神仏分離で、金毘羅大権現は金刀比羅宮となった。この時代の変わり目に金毘羅への信仰をつなぎ止めるために、明治7年、「金刀比羅宮崇敬講社」が創設された。そこには、従来の参詣講・寄進講を組織的に発展させる狙いがあった。近代にはいっても同宮は、航海安全の神としての信仰を基盤に、海軍、商船、運送船にかかわる人々から、篤い信仰を受けた。<sup>19</sup>金毘羅参りは単なる物見遊山ではなく、その根底に信仰の旅という性格を保ち続けて今日に至った。

内陸部の象頭山に鎮座する金刀比羅宮には、瀬戸内海の港から丸亀街道や多度津街道などが通じており、参詣客はこれらの道を辿った。明治20年代、琴平へ向かう鉄道が敷設された。多度津で廻船問屋を営む大隅屋・景山甚右衛門が金刀比羅宮参詣客の輸送の便を図るために讃岐鉄道を設立し、丸亀～琴平間が開業（明治22年）したのである。

高松方面の交通では、明治30年、讃岐鉄道の丸亀～高松間が延伸し、高松と琴平が鉄道でつながることとなった。讃岐と山陽を結ぶ経路として、明治36年、山陽汽船が岡山～高松間、尾道～多度津間の航路を開く。そして明治43年、宇野～高松間の宇高連絡船運航開始に伴い、高松が四国の玄関口となった。しかしながら、昭和初年、阪神方面から高松や金刀比羅宮に行くには、依然として海路が中心であった。<sup>20</sup>

高松の東方に位置する屋島へは、明治44年、東讃電気軌道が高松の今橋～志度間を開業して屋島駅が設置された。その後、高德線屋島駅も開業（大正14年）する。加えて昭和4年、屋島登山鉄道株式会社が屋島神社前～屋島南嶺間のケーブルカーを開業（平成17年廃止）し、屋島探勝が便利になった。

一方、伊予では、早くも明治21年、四国最初の伊予鉄道が三津～松山間を開業する。これにより、瀬戸内海航路の寄港地であった三津浜から松山市街地への交通の便が整えられた。その後三津に替わって寄港地となる高浜へ伊予鉄道が延伸する（明治25年）。また、道後温泉へ浴客を輸送する目的で道後鉄道が設立され、明治28年に道後～三津口間、道後～一番町間が開業し、道後温泉への交通の便が整えられた。松山と高松が鉄道でつながるのは昭和5年のことで、それ以前の松山に向かう旅は、船を利用するのが一般的であった。

## (2)「讃岐遊覧案内」(大阪商船、昭和9年)

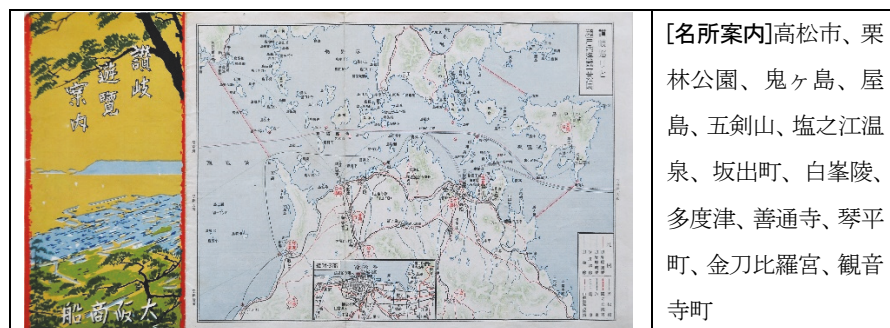
大阪商船発行（昭和9年7月）の「讃岐遊覧案内」〈資料3〉は、讃岐の名所を広く紹介した四折り 19.0×9.5cm パンフレットである。表紙は高松付近から屋島方面を望む絵柄で、裏面に「讃岐巡りと瀬戸内海国立公園」と題する地図を掲載する。瀬戸内海国立公園の指定は昭和9年3月であり、その4か月後に発行されたパンフレットである。

地図内に国立公園界が示されている。東は、香川県志度から津田に至る岬先端にある馬ノ鼻から小豆島南東端の大角鼻を結ぶ線、加えて小豆島北西端の蕪崎から岡山県児島半島東の坊子島を結ぶ線である。西は、多度津と観音寺のほぼ中間に突き出た荘内半島三崎から広島県鞆の浦西方に位置する阿伏兎観音付近を結ぶ線である。この備讃瀬戸に浮かぶ直島諸島、雌雄島、

塩飽諸島、笠岡諸島周辺の海域が戦前に指定された瀬戸内海国立公園の範囲であった。<sup>21</sup>

地図には、九つの○印がついている。小豆島の寒霞溪、高松の栗林公園、屋島、琴平、善通寺、多度津の桃陵公園、観音寺の琴弾公園、塩ノ江温泉、五郷谷温泉である。これらが讃岐の主な観光名所であることがわかる。本文中の名所案内は、〈資料3〉の通りであり、若干の違いはあるものの地図の○印とほぼ重なっている。

〈資料3〉「讃岐遊覧案内」(大阪商船、昭和9年)



名所案内における瀬戸内海沿岸の讃岐の主な街として、高松・坂出・多度津・観音寺の紹介がある。高松は、玉藻城が麗しい姿を高松港の静波に映じているが、かつて海水に洗われていた石垣を囲む堀は埋め立てられた、と記す。坂出は、前面に浮ぶ瀬居島付近が金山鯛の漁場として名高く、五月の日曜日には鯛網観覧船が仕立てられることが紹介されている。かつて鯛の好漁場であった瀬居島付近の番の洲は、今日埋め立てられて工業地帯になっており、ここに記された光景を今は見ることはできない。多度津は船の寄港地で、ここから丸亀、善通寺、琴平へ電車・汽車が通じていることを述べる。とりわけ興味を引くのは観音寺の記述である。観音寺が大阪商船の寄港地になったのは、昭和9年7月であった。以来、俄に遊覧地となったこと、その地の琴弾山は瀬戸内海の眺めがよく、海辺は風光絶佳の勝地で、瀬戸内海随一の海水浴場があることを紹介する。

次いで、讃岐の名だたる名所として、栗林公園、屋島、金刀比羅宮の記述を紹介する。先ず、栗林公園を挙げる。

「園は南庭と北庭に分れ六大水局と十三大山坡とあり、藩公数世の富と巨匠の苦心により築かれたものだけあって、規模の広大、風致の高雅、人工と天然とよく調和して、一樹一石一水と雖も蒼古秀麗ならざるはなく、翠緑滴るが如き紫雲山を取って園中のものとし、泉池細流あり、池を廻りて小径を通じ、巨岩珍石、良樹美草此間を点綴し、一步一景触目常に新に、池中には群鴨眠り鯉魚躍り、誠に天下の名園たる名に背きません」

紫雲山を借景に六つの池と十三の築山を配した大名庭園、それが栗林公園である。「池を廻りて小径を通じ」は廻遊式庭園を示し、「巨岩珍石良樹美草此間を点綴し」は雅趣にとんだ木石の様子を表す。このような栗林公園は、讃岐を代表する観光名所になっていた。

二つ目は、屋島の記述である。屋島山頂は南嶺と北嶺に分れており、南嶺に屋島寺・獅子霊巖・談古嶺の名所が、北嶺には遊鶴亭があることを述べる。獅子霊巖から望む瀬戸内海の記述を紹介する。

「濶然として展望無碍、瀬戸内海は脚下に展け、蒼海波穩に男木女木を始め大小の島嶼点々暮布し遠く中国の連峰を淡靄模糊の中に望み風光絶佳、内海第一の勝地であります」

展望は何の妨げもなく足元にひらけ、波静かな大海原に男木島・女木島（雌雄島）をはじめ大小の島々が点在し、遠くに中国山地がうすもやのように霞んでいる、とその風景を述べる。この獅子霊巖は、今も瀬戸内海展望スポットとして知られる場所である。さらに、談古嶺から東を望む描写である。

「崖下千仞、壇の浦の煙波は静に眠り五剣山は浦を隔てて屹立し、凌々として天を衝いて居ります」

崖下は極めて深く、その向こうに見える壇の浦は水面が煙るように波立ち、対岸に五剣山が鋭く天を突くように聳え立つ様を述べる。五剣山は古来修行場として知られ、中腹に四国八十八か所霊場の一つ、また聖天様の信仰を集める八栗寺が建立されている。そして、この屋島一帯が国立公園として指定されたのはもっともなことだ、と記す。

三つめは、琴平町・金刀比羅宮の記述である。先ず、琴平の門前風景である。

「高燈籠、鞆橋等名高く、金刀比羅宮の参道両側には旅館、土産物店が軒を列ね四時賽客道を埋めて殷賑を極めて居ります」

金刀比羅宮では、高燈籠や鞆橋が有名である。北神苑に建つ高燈籠は、慶応元年（1865）に奉納されたもので、瀬戸内海を往く船乗りの航海の目印になっていた。鞆橋は金倉川に架かる両入口に唐破風を備えた屋根付きの橋で、何度か再建を繰り返し、現在の橋は明治2年に架橋された（明治37年に現在地に移築）。そして参道両側には旅館や土産物店が軒を連ね、大いに賑わう様子が記されている。金刀比羅宮については、麓から本社に至る間に現れる数々の建物を紹介し、最後に本社前境内からの眺めに触れる。

「讃岐平野は脚下に展開して讃岐富士、白峯、屋島、五剣山を煙霞の裡に望み宛ら大和絵を見るやうであります」

江戸時代から盛んに行われていた金毘羅参りには、ご神徳をいただくとともに、門前の土産物屋を覗き、絵のような讃岐平野の風景を眺める楽しみがあったことがわかる。

その他、注目される記述として、高松市の前に浮ぶ女木島が「近時桃太郎の伝説にある鬼ヶ島として宣伝せらるるに至った」とある。「近時」というから、本パンフレット発行（昭和9年）の少し前のことであろう。これについては、後述したい。

パンフレット末尾に、前述した「讃岐遊覧券」の案内が出ている。これは、阪神から大阪商船の多度津線に乗って多度津に上陸し、電車で琴平、栗林公園、屋島に遊び、高松から乗船して阪神に帰着する（又はその反対コース）船車連絡の割引切符（1～2割引）のことである。希望により、栗林公園掬月亭の昼食券、高松玉藻ホテルほかの夕食券も遊覧券と併せて取り扱っ



ていた。瀬戸内海国立公園が誕生したころ、さまざまな工夫を凝らして讃岐巡りの旅を盛り上げようとしていた様子が伝わるパンフレットである。

### (3)「高松と琴平」(高松市観光課、昭和9年以降)「鬼ヶ島」(同、昭和12年以降)

讃岐に観光客を誘致しようと、高松市観光課も独自にパンフレットを作成している。手元に「高松と琴平」〈資料4〉、「鬼ヶ島」〈資料5〉の二葉がある。いずれも発行年が記されていないが、文中の記載から「高松と琴平」は瀬戸内海国立公園制定(昭和9年)以降、「鬼ヶ島」は後述する理由から昭和12年以降のものであると思われる。「高松と琴平」は、四折り 17.5×9.5cm のパンフレットで、表紙に高松を中心とする付近の名所を書き入れた略図を配置する。また、「鬼ヶ島」は、四折り 17.8×9.5cm のパンフレットで、表・裏表紙を一体として、猿・犬・雉をお供に女木島に向かう桃太郎のイラストを載せる。

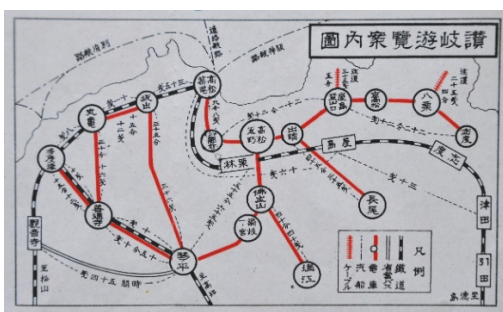
#### 〈資料4〉「高松と琴平」

(高松市観光課、昭和9年以降)



#### 〈資料5〉「鬼ヶ島」

(高松市観光課、昭和12年以降)



「高松と琴平」の冒頭文を紹介する。

「高松と琴平は讃岐観光上の二大目標、昔の金比羅道中時代はいざ知らず今日では両者の所要時間一時間足らず、全く半日の行程である。鉄道も電車も皆高松が起点、コースの何れを問はず高松は讃岐来遊の安息所として一番便利の位置を占めてゐる」

「金比羅道中時代はいざ知らず」の記述がふるっている。江戸時代以来、金毘羅参りは、船にのって丸亀や多度津の港に着き、そこから街道を歩いて行くのが習わしであったが、今は、高松から鉄道・電車で僅か一時間足らずで行くことができる、と謳うのである。

本文中に四枚の写真を載せる。栗林公園、金刀比羅宮、屋島、鬼ヶ島である。讃岐を象徴する由緒ある名所に新興の鬼ヶ島が加わっているのは、高松市役所観光課の思い入れであろうか。本文は、高松を中心とする名所旧跡として、高松城・栗林公園・石清尾八幡神社・高松大仏・屋島・八栗聖天・鬼ヶ島・寒霞溪・白峯御陵・金刀比羅宮・善通寺・田村神社・塩江温泉の13か所を紹介する。前述の「讃岐遊覧案内」〈資料3〉と9か所が重なるが、他に高松から船便の

ある小豆島の寒霞溪、有名とはいえない地元の社寺3か所を掲載している。

栗林公園の記述「園内には香川県商品陳列所、美術館、動物園、プール等の施設がある」は、〈資料3〉に見られない記述である。藩主松平氏の別荘栗林荘が栗林公園として一般開放されたのは明治8年のことで、その後、園内に香川県博物館（商工奨励館）が開館し、昭和期に入ると動物園が開園し、プールが併設されるなど、栗林公園は市民の憩いや学習の場としての色彩を帯びる。その地元目線は、いかにも市役所作成のパンフレットらしい。

本パンフレットには高松を起点とする半日遊覧コース4、一日遊覧コース3の計7コースが所要時間とともに示され、挿図の「讃岐遊覧案内図」とともに、実用的な内容となっている。

もう一つの、「鬼ヶ島」〈資料5〉は、桃太郎伝説を中心に紹介するパンフレットで、洞窟、景観美、海水浴場、日蓮上人銅像の案内文がある。女木島山上鷲ヶ峯に立つ銅像は、昭和12年4月に開眼式が行われているため、パンフレットはそれ以降の発行である。「日蓮上人銅像は眼光鋭々として輝き非常時局の国難を雄叫びしてゐる感がある」の一文は、戦時体制下の気配が漂う。鬼ヶ島の冒頭文を記す。

「鬼ヶ島と云ふのは一体何処にあるのでせうか。四国の高松市の沖合にある女木島と云ふのが、昔の鬼ヶ島だったそうです。此島の中腹には鬼共が住んでゐた大洞穴があつて、今では誰でもその中に入って、宝庫や大広間の跡を見物する事が出来ます」

この伝説の桃太郎は吉備臣の祖とされる稚武彦命、お供の犬は岡山県犬島のもの、猿は讃岐陶村（現綾川町）猿王のもの、雉は同じく讃岐鬼無（高松市鬼無町）付近雉ヶ谷のもの、そして鬼は備讃海峡に巣窟する海賊である、と説明する。加えて、鬼ヶ島は瀬戸内海国立公園の中にあつて、付近の景色がなかなか美しいので、この頃大勢の人たちが遊覧に出かけるようになったことを記す。

女木島の洞窟は、大正3年、香川県内の小学校長を歴任した郷土史家でもある橋本仙太郎により発見された。その頃、鬼退治伝説の調査に飛び回っていた橋本は、童話桃太郎の発祥地は讃岐の鬼無だと主張して注目された。そして昭和6年、女木島の洞窟は「鬼ヶ島」と名づけられ公開された。昭和初期、讃岐に限らず他地域でも桃太郎は人気者になっていた。<sup>22</sup>本パンフレットに掲載された写真の一枚に、「大洞窟登山口」と大書した標柱が写っている。保勝会が立てたもので、女木島を観光地にしようとする意気込みが伝わる一枚である。

高松の市街地の沖に浮かぶ鬼ヶ島は、まさに昭和初期に創設された新興観光地であり、市役所も勢いに乗って躊躇なくパンフレットを発行して積極的に宣伝に努めていたことを物語る一葉である。

#### (4)「道後と松山」(大阪商船、昭和9年)

大阪商船発行（昭和9年2月）の「道後と松山」〈資料6〉は、松山を中心とする伊予の名所を紹介した四折り 18.9×9.4cm パンフレットである。表紙は温泉に浸る人、瀬戸内海を往く船の絵柄で、裏面に地図を掲載する。

地図には、八つの○印がついている。道後、大三島、面河溪、高浜、今治、壬生川、郡中、長浜である。松山付近の主な観光名所は道後、大三島、面河溪の三つで、高浜、今治、長浜は大阪商船の寄港地である。本文の名所案内は、〈資料6〉の通りであり、なかでも道後温泉と松山城を詳しく紹介している。本文中に6枚の写真を掲載する。高浜港、道後温泉、松山城、面河溪、石鎚山、来島海峡で、これらが伊予の観光地を代表するものであろう。先ず、冒頭文を紹介する。

〈資料6〉「道後と松山」（大阪商船、昭和9年）



[名勝案内]高浜、梅津寺海水浴場、三津、道後温泉、道後公園、常信寺、石手寺、岩堰、松山市、松山城、石手川公園、十六日桜、面河溪、石鎚山、来島海峡、大山祇神社、鹿島

「道後温泉、松山城、面河溪、石鎚山、来島海峡、大山祇神社（大三島）、等、等、…名勝遊覧地の多い伊予への御遊覧には弊社の左記航路を御利用下さい。内海の島々を縫ふて走る船旅の爽快味、道後の湯心地、面河の仙境、そして桃、梨、柿、蜜柑と、四季さまざまな伊予の果物、内海の珍味佳肴、遊覧と保養にはまづ道後へ！松山へ！」

この一文により、道後温泉をはじめ松山城、面河溪、石鎚山、大山祇神社が伊予を代表する遊覧地であることが改めて確認できる。阪神発の大阪別府線昼便は、早朝高浜港に入港する。晩便は翌朝、今治、高浜、長浜の三港に寄港する。帰りは夕方高浜を出ると翌朝阪神に着く船が航行していた。ほかに大阪若松線もあり、関門付近から道後入湯に便利であった。

名所案内には、伊予の瀬戸内海沿岸の主な街として、高浜<sup>23</sup>・三津<sup>24</sup>・松山市<sup>25</sup>を紹介する。本パンフレットの主題の一つ道後温泉については、その歴史から書き起こし、次いで温泉場の案内に移る。

「町の中央に三層の楼閣を構へ、又新殿、霊の湯、神の湯、養生湯があり、又新殿は高貴の方をお迎えするのみで、霊の湯、神の湯、養生湯が一般の浴場で、入浴料は霊の湯四十銭、神の湯二十銭、養生湯十銭で、階上には湯女を置き、茶菓を供して居ります」

三層の楼閣とは、明治27年建築の神の湯本館である。屋上に金属製の鷲を戴く振鷲閣と呼ぶ塔屋を付け、そこに備えた刻太鼓を朝6時の開館時、正午、夕方六時に打ち、時刻を告げている。又新殿とは、5年後の明治32年、皇族の入湯用に普請された二階に玉座の間を備えた建物である。霊の湯は又新殿と同じ棟である。その当時、最も安価に利用できた養生湯は、昭和29年に廃止になった。「湯女を置き茶菓を供す」とあるが、神の湯二階、霊の湯において、今なお



茶菓子のサービスが続いている。次いで宿泊施設の記述である。

「旅館は浴場を取り囲んで櫛比し、一泊二食付一円廿銭より五円迄、昼食料六十銭より二円五十銭迄、又木賃と云って五十銭より一円位までの軽便な自炊旅館もあります。各地からの交通も至便なので、一日の遊覧に、長期の保養入湯に浴客の絶間がありません」

本パンフレットには、当時、道後温泉にどれほどの旅館があったか記載がないが、同年発行の『日本案内記』<sup>26</sup>によると、約七十軒の旅館があったこと、それらの旅館にはいずれも内湯がなかったこと、この道後温泉本館の他に鷺湯、砂湯、西湯、松湯などの共同浴場があったことが記されている。道後温泉の旅館に内湯が引かれたのは戦後のことである。

道後温泉付近の見所として、道後公園、常信寺、石手寺が紹介されている。道後公園は河野通治が城主であった湯月城跡が公園となったもので、浴後の散策に杖を曳くべきところ、と記す。常信寺は境内に桜樹多く春は桜花の美を謳われている、と語る。また石手寺は四国第五十一番札所で、堂塔山門が特別保護建造物になっていることを紹介する。

次いで、松山城の案内文である。鬱蒼たる老樹におおわれた勝山山頂に建つ松山城は、当時、公園となり一般に開放されていた。本パンフレット発行半年前の昭和8年夏、本丸にあった城門、櫓は怪火により焼失してしまった。焼失を免れた天守閣、二の丸、三の丸が残されていた。天守閣から眺める風景が次のように記されている。

「道後平野は脚下に広がり、北には内海の碧波と、群島を展望し、南は久万山脈を隔てて石鎚山の秀峰に対し、風光の雄、眺望の佳、内海に冠絶して居ります」

松山城下から足元に道後平野が広がり、瀬戸内海に浮かぶ島々や石鎚山などが望まれ、その眺めは抜群である、と讃える。

その他の記述として来島海峡、石鎚山、面河溪を紹介する。来島海峡には、狭隘な水道、急流、島嶼、岩礁、老松、密林、漁家、白帆と瀬戸内海の美が集まっていて、船上からの展望もいいが、波止浜公園からの眺望が最も佳い、と記す。

石鎚山については、四国第一の高峰であり、夏季には行者が列をなして登山することに触れ、頂上に立てば南は太平洋、北は瀬戸内海より中国地方を遠望することができる、と紹介する。登山は、伊予小松駅から黒川を経ていくルートが示され、帰途は面河溪を探勝して道後温泉に疲れを休めるのが順路である、と記す。

石鎚山南西に位置する面河溪は、黒川からの石鎚山登山後に下って到達するルートの他に、松山から久万を経て栃原まで乗合自動車の便があり、三時間半を要した。栃原から面河溪入口の関門まで約二里の道程であった。最後に、面河溪の描写を紹介する。

「面河の勝景は数十丈の巖壁相迫り、楓樹深淵に映る関門の絶景に始まり、紅葉河原、五色河原、亀腹巖等の奇勝佳景があり、石鎚山より流れ出づる清流は岩に激し、淵に淀み、深淵、奔湍、奇岩、怪石、奇を尽し、妙を極め…」

関門を過ぎると紅葉河原、五色河原、亀腹巖等の素晴らしい景色が展開し、その溪谷はとても優れていて、雄大豪壮であると記す。そして、面河溪は新緑、盛夏によく、殊に秋は紅葉が

碧流に映り、その美観は嘆賞の言葉もないほどだ、と讃える。

本パンフレットは、松山・道後のみならず、その周囲に広がる伊予の風光の魅力を簡潔に伝えた一葉である。

#### 4.別府への旅

##### (1)別府温泉

温泉地として知られた別府は、観光客はもとより湯治客が訪れる地であった。昭和2年、別府温泉は「日本新八景」温泉部門第一位に選ばれるが、その取材で別府を訪れた高浜虚子は、「別府温泉」<sup>27</sup>に、ある人の話としてこんな一文を記している。

「春の四、五月の頃になると、山口県の大島郡とか佐波郡とか又愛媛県の八幡浜附近の海岸の村では、一艘の船に米、味噌、醤油を積み込んで、二、三十人の人が一団となってこの別府に来る。帆を掛けては行って来たその船は、波止場に繋いで、三週間ばかり滞在する。その間それ等の人は勝手に共同温泉には行って、夜はこの船に帰って寝る。船では『大島郡何々村』と書いた大きな札を帆柱に打ち付けて置くと郵便配達夫はその船まで郵便物を配るという風であるそう。時には御詠歌を歌って町をあるいて一銭二銭の報酬を受ける。一円か二円たまると、それで寄席にはいるとか氷水を飲むとかするのを楽しみにしているそう。一人五円位の費用で三週間入湯して行くことが出来るのだそう」

近県の人々が船を仕立てて別府温泉にやってきて、ゆくりと滞在しているのどかな晩春の情景が彷彿される。山口県大島郡出身の民俗学者宮本常一先生は、『民俗学の旅』<sup>28</sup>において、「私にとってのふるさと」として、このようなことを記している。

「(旧暦三月頃)豊後の別府へ湯治にゆく船も出た。これは船頭が湯治にゆく者を勧誘して出かけてゆくのである。別府へつくと湯の宿を借りて、そこで自炊しながら一週間をすごして帰ってくる。そうした船が帰ってくると隣近所へ土産を配り、また旅の話に花がさいて、村の中は明るくにぎやかであった」

別府に湯治にいく船は船頭が人を集めていること、別府では自炊宿を借りることも行われていた様子がわかる。そして別府の湯治から帰ると土産話に花が咲き、村の中が明るくなったとは、いかにも生き生きとした地域社会の人のつながりを感じさせる叙述である。

前掲の『瀬戸内海航路案内』(大阪商船、大正2年)<sup>29</sup>には、この自炊宿のことが紹介されている。別府の旅館には「旅籠」と「木賃」の二種類があり、「木賃」が自炊宿に当たる。「木賃」の仕組みが、同書に次のように示されている。

「室を借切ると合宿するとの二ありて定めたる室代或は畳代を支払ふ外は客の自炊に任せ、自炊に馴れざる人には代りて宿より調理をなし呉るの便もあり、何れにしても宿は米塩の類・蒲団・座蒲団・薪炭・蚊帳等宿泊に要する物品を一々細別し、各品に応じて其の価を定めて客の需むるものを供給すべく、又朝夕の味噌汁香の物と、昼の香の物及湯茶は宿より振舞ふの例にして、飯も炊き呉る定めなれば、家族連れ又は長逗留の湯治客には却

て趣味深く且経費安き極めて便利なる方法なりとす」

「木賃」には、きわめて細やかな料金設定が見られた。自炊といえども米を買えば飯を炊いてくれる、また朝夕には味噌汁と漬物、昼も漬物、そして湯茶が宿から振舞われる。「木賃」の名を冠した旅館の中には三百人を収容する大厦高楼や、別荘を持つものも見られ、泊り客には貴顕富豪もあって繁盛を極めている、とも記す。

近代に入り別府港が築港（明治4年）されると、大阪から月に一度木造蒸気船が寄港するようになり、やがて明治17年に大阪商船、翌18年には宇和島運輸が貨物や乗客の取り扱いを開始した。この海上交通により、別府と阪神や四国とのつながりが強まったのである。明治33年に大阪商船別府支店が開設された。また明治45年には阪神～別府間に観光航路が開かれて客船紅丸が就航したことは前述した。この時期から別府は観光地として急激に発展をはじめる。そして大正5年に大阪商船専用の木造栈橋がつくられ、大正9年にはコンクリート製の固定栈橋が完成し、毎日の出航体制が整えられたのである。

一方、鉄道においては明治44年、旧豊州本線（現日豊本線）別府駅が開業し、小倉～別府間が結ばれるとともに、同年、別府～大分間が延伸する。また、大正2年に耶馬溪鉄道中津～樋田（後の洞門駅）間が開通すると、別府は耶馬溪探勝の門戸となった。大正6年には九州自動車がハイヤーで「地獄遊覧」を開始し、別府観光に新しいスタイルが取り入れられていく。そのような盛り上がりの中で、昭和2年、大阪毎日新聞・東京日日新聞主催「日本新八景」において別府は温泉部門第一位に選ばれ、その名をほしいままにしたのである。

## (2)「別府へ」(大阪商船、昭和12年12月)

大阪商船発行（昭和12年12月）の「別府へ」〈資料7〉は、別府温泉及び別府を起点とする九州各地の観光旅行を概観するのに好都合なパンフレットである。体裁は、22.6×19.0cm、表紙を含めて12頁の冊子である。同年、同じ体裁のパンフレットが大阪商船から複数発行されているので、シリーズの一冊であろう。<sup>30</sup>

〈資料7〉「別府へ」（大阪商船、昭和12年）



「別府へ」の表紙は、双眼鏡を持ってデッキに立つ洋装の女性の絵柄、裏表紙は別府耶馬溪

阿蘇付近図となっている。本文は、阪神別府航路及び呉広島別府航路の案内、阪神からの九州遊覧二プラン、別府とその近郊の遊覧地御案内〈資料7参照〉、別府を中心とした遊覧地の内容構成である。本文中に24枚の写真を掲載する。うち6枚は大阪商船こがね丸・にしき丸・すみれ丸の写真である。また6枚は別府の写真であり、砂湯・坊主地獄・観海寺温泉・志高湖・別府ゴルフリンク・ハイキングとなっている。他の12枚は別府を中心とした遊覧地のもので、由布院温泉・耶馬溪羅漢寺・耶馬溪青洞門・宇佐八幡宮・水郷日田・杖立温泉・阿蘇山・九州アルプス（久住山ほか）・風連鍾乳洞・霧島の大浪池と韓国岳・鶴戸神宮・青島である。これにより、別府を代表する観光名所がわかるばかりか、別府を起点として遊覧する九州の観光地の姿が浮かび上がってくる。

先ず、冒頭文を紹介しよう。

「阪神、四国、九州を結ぶ大阪商船の別府航路は世界に類を見ない海上公園瀬戸内海を横断するもので、この航路はまた東京、阪神、別府、阿蘇、雲仙、上海等をつなぐ国際観光ルートにも当たります」

外国人旅客誘致の国策に沿って構想された「国際観光ルート」<sup>31</sup>や、パンフレット発行3年前に指定された瀬戸内海国立公園に触れる。それ故に使用船は何れも観光船として優秀な船を揃え、いながらに明媚な風光を鑑賞することができる設備を備えている、と謳う。記述を続ける。

「神戸出帆後約三時間で海上公園区域に入り、備讃瀬戸、塩飽諸島の多島海中心地を過ぎ、天下の絶勝来島海峡を抜けて伊予の北岸沿ひに西へ西へと進み、十七時間の航海の後別府に入港するものであります」

航路東方の海上公園区域は、前述した讃岐の馬ノ鼻―小豆島大角鼻を結ぶラインが相当する。そこを通過して、備讃瀬戸に浮かぶ塩飽の島々を眺め、燧灘を過ぎ、愛媛県今治と大島を隔てる来島海峡を抜け、斎灘、安芸灘を航行し、やがて船は別府湾に入港する。沿岸各地の寄港地の名所にも触れる。

「これら沿岸各地には歴史と景観に名高い屋島や日本三公園の随一栗林公園を控へた高松港。来島海峡、松山、道後温泉への門戸たる高浜港。西予の要津長浜の諸港に寄港致してをります」

屋島、栗林公園、松山、道後温泉と、これまで触れてきた寄港地の名所を挙げる。なお「日本三公園（名園）」とは、一般に、水戸の偕楽園、金沢の兼六園、岡山の後樂園を指すが、栗林公園はそれよりも優れている、とする見方が明治後期からあった。

昭和12年当時の阪神別府航路の使用船舶は、進水間もないこがね丸（昭和11年進水）、にしき丸（昭和9年進水）をはじめ、すみれ丸（堇丸から改名）、むらさき丸（紫丸から改名）、くれない丸（紅丸から改名）であった。<sup>32</sup>船には食堂、展望談話室、喫茶室、ベランダ等が備わり、海上公園瀬戸内海の観光船にふさわしい装飾を施している、と謳う。

別府見物の帰りは、門司まで出て、門司～神戸間の大阪商船近海航路（日満連絡航路、内台連絡航路、天津航路等）を利用して大型船の旅を味わうこともできた。この中には広島に寄港

するものもあり、碇泊時間を利用して宮島見物ができた。また、別府から宮島・岩国錦帯橋見物をするには、呉広島別府航路（呉～広島～宮島～岩国～柳井～鶴川～別府～大分）の利用となる。

次いで、「別府とその近郊の遊覧地御案内」の一文である。

「海に、山に、野に、川に、旅館と云ふ旅館に、家庭に、商家に、棟割長屋にまで、温泉が湧いて湧いて一日の湧出量約三十万石、その泉質は多種多様、(中略)まさに別府は湯に浮んだ町と云ふべきであります。秀麗な風光と相俟って年間百万人を超ゆる浴客を迎へるのも当然と申さねばなりません」

別府はありとあらゆる場所に温泉が湧き、棟割長屋にまで温泉があり、「まさに別府は湯に浮んだ町」との形容は、湯の街別府の特徴をうまく言い表している。湧出量と来訪客の数はかなり誇張気味であると思われる。<sup>33</sup>そして、十数か所の市営公共浴場が一部を除いて無料で公開されていることを述べる。

別府温泉とは、別府・浜脇・海音寺・堀田・明礬・鉄輪・柴石・亀川の八湯を指す。本文中に「別府遊覧略図」が挿入されている。別府駅から東別府駅に至る海辺に位置するのが別府温泉、浜脇温泉であり、別府温泉には砂湯がある。別府駅から亀川駅にかけての海浜は、北浜海水浴場、餅ヶ浜海水浴場、聖人の浜、亀川海水浴場と長汀の浜が続き、亀川温泉にもう一つの砂湯が略図に描かれている。別府駅の奥の山裾に観海寺温泉、堀田温泉が、亀川駅の奥の山裾に柴石温泉、鉄輪温泉、明礬温泉が記されている。「遊覧地御案内」として別府・浜脇を除いた六温泉の案内文が出ている。別府市街地からやや離れた六温泉は、おおむね眺望がよく閑寂な環境に包まれていた。別府には、別府公園、東公園、松原公園をはじめ乙原遊園、鶴見園、山水園・躑躅園といった公園遊園地等があり、訪れた浴客が楽しめる場所が数多くあった。六温泉及び公園等の概要を整理すると〈表4〉の通りである。

別府公園が完成するのは明治40年のことである。大正5年には別府公園内に大分県物産陳列場が開館し、これが県殖産館となる。別府公園では中外産業博覧会(昭和3年)や別府国際温泉観光大博覧会(昭和12年)が開かれるなど、別府の地域振興の拠点となった。浜脇の東公園も明治44年開園の古い歴史を持っている。松原公園付近は歓楽街であり、松濤館(明治40年)・松栄館(大正7年)などの劇場や映画館などが建ち並ぶところとなった。大正末年から昭和にかけて、鶴見園、ケーブル遊園(乙原遊園)が開業する。大正15年2月に開園した鶴見園は、大浴場・温泉プール・各種娯楽設備・歌劇場を備え、「九州の宝塚」とも呼ばれた別府随一の集客施設である。ケーブル遊園は、昭和4年の別府遊園地索道開通とともに開園した展望温泉を備えた施設である。表には加えていないが、昭和5年にはゴルフリンクスも開場し、別府は漸次、娯楽地としての性格を強めていった。

最後に、地獄めぐりの記述を紹介する。

「その最も壮観なのは坊主、海、竈、血の池の諸地獄であります。見物には流川通りから回遊バスが三十分毎に発車してゐます。少女車掌の説明付で料金一円、他に地獄見物料五

十銭、所要時間約三時間」

〈表4〉「別府へ」（昭和12年）に見る別府六温泉と公園等

遊覧地	記載内容の概要
海音寺温泉	市背を成す観海寺山の中腹にあつて、海を抱き市街を見下し眺望絶佳。桜、紅葉など四季花の名所。
堀田温泉	鶴見山麓にあつて三面山に囲まれ、東方遙かに別府湾を望み、眺望佳き閑寂な温泉境。
亀川温泉	別府湾の碧海に面して、風光明媚、北別府の称があります。
柴石温泉	熱湯溪谷を嘯む幽邃の地で、温泉は湯滝を特色とし…
鉄輪温泉	土地高燥で空気清澄、眺望甚だ広濶である。鉄輪、海、坊主、紺屋地獄の中央に位し、鉄輪の誇たる蒸風呂があり…
明礬温泉	海山の眺めを恣にする閑寂境で、名産湯の花の産地であります。
別府公園	市設の森林公園で広大なグラウンド、温泉神社、県殖産館等があります。
東公園	市街を脚下に豊洋の大観を一眸に収める事が出来ます。
松原公園	泉都の歓楽境となつてゐます。
乙原遊園	乙原遊園へのケーブル・カーがあります。（中略）温泉に浸り乍ら市街や豊予の島々を眺める事の出来る展望温泉もあります。
鶴見園	桜の名所で、別府の遊園地をなし、少女歌劇、大浴場、温泉プール其他各種の遊戯場があります。
山水園・躑躅園	桜、躑躅の名所で、池、滝、亭、奇岩、芝生等を配する雅致ある庭園です。

別府の「地獄巡り」は、大正6年に九州自動車が高ヤーを用いて開始している。しかし、当時、道が良くなかった。大正10年に地獄循環道路（県道）が完成する。そして昭和3年、油屋熊八が設立した亀の井自動車株式会社により地獄めぐりバスの運行が始まり、大いに人気を博した。もっとも、それ以前にも海地獄や血の池地獄を見物する人はおり、明治43年、海地獄が遊覧施設を調べて入場料を徴収したのが地獄巡りの始まりとされている。前掲『瀬戸内海航路案内』（大正2年）<sup>34</sup>には地獄巡りとして次の記載が見られる。

「【温泉及地獄巡り】別府町の諸温泉を過ぎ観海寺に登臨し鉄輪に廻り、海地獄の奇を探り、柴石の湯滝に浴し、血の池地獄の凄壮を見、亀川に出ず」

また、『鉄道旅行案内』（大正7年）には「地獄巡り」としての記載はないものの、血の池地獄、地獄の火（鉄輪温泉）、海地獄、坊主地獄、紺屋地獄の名称が現れる。『旅程と費用概算』（大正15年版）「長崎—阿蘇—別府廻旅」<sup>35</sup>に「地獄廻り」「地獄巡り」の名称が現われ、順路は示されていないが、交通手段が次のように出ている。

「別府温泉地獄巡り自動車乗合ハ一日三回運転、二時半ニテ一巡ス、乗客四人以上ノ場合

ハ臨時運転ヲ為ス、料金二円」

さらに同書（昭和5年版）<sup>36</sup>に「地獄めぐり」の遊覧順序が次のように現れる。

「別府温泉—観海寺温泉—八幡地獄—鶴見地獄—鉄輪温泉—明礬温泉—坊主地獄—海地獄—柴石温泉—かまど地獄—血ノ池地獄 遊覧自動車デ二時半、亀ノ井ホテル廿五人乗バス 前八時カラ後三時迄廿五分毎ニ発車料金一円」

わずか四年の間に地獄巡りの乗合自動車の運行回数が三回から25分毎に頻発するようになったばかりか、料金も半額に値下げされている。さらに、地獄巡りの順路が確立していたこともわかる。前述した「日本新八景」温泉部門第一位に入選（昭和2年）、亀の井自動車株式会社による地獄めぐりバスの運行開始（昭和3年）前後では、別府観光の様相が大きく様変わりしていたことが窺える。なお、『鉄道旅行案内』（大正13年）<sup>37</sup>には、「温泉巡り地獄巡りには別府亀川から乗合又は貸切自動車があり、乗合一人二円八十銭、約二時間半、歩いても八九時間で充分である」と記されている。地獄循環道路が完成しても、徒歩で八～九時間をかけて悠長に「地獄巡り」をする人がいたのであろう。

本パンフレットは、別府温泉の概観を知るうえで参考になるが、他資料と対比していくことで、さらに対象地のイメージが膨らんでくる。

## まとめ

昭和初期の瀬戸内海の旅を特色づけるのは、船旅であった。日本郵船と並ぶ我が国の二大船会社であった大阪商船は、明治期に、瀬戸内海はもとより西日本、そして国外にも航路を開いた。同社が刊行した初期の航路案内書とされる『大阪商船株式会社航路案内』（明治36年）には、名所旧跡の項目に観光案内的な記述が見られるとともに、瀬戸内海航路に最新式の堅牢美麗の「遊覧船」が含まれていることを謳っており、すでにこの時期から遊覧旅行に出かける人が出始めていたことを想起させる。

明治45年、大阪商船は阪神・別府間に観光航路を開設する。その翌年に刊行した『瀬戸内海航路案内』（大正2年）は、各寄港地における遊覧地案内を中心する本格的な旅行案内書であり、「快速美麗なる船に乗って瀬戸内の風景を愛でる旅は天にも昇る心地がする」と船旅に誘う。同書掲載の「廻遊旅行の栞」には「瀬戸内海周遊」（七日間）をはじめ多様なモデルコースが掲載され、大正初期の瀬戸内海の旅の在り方を知るうえで参考になる。

また、『旅程と費用概算』（大正9年版）の「瀬戸内海遊覧」（東京起点八日間）には、神戸の須磨ノ浦、讃岐の栗林公園・屋島壇ノ浦・小豆島寒霞溪・善通寺・金刀比羅宮、安芸の宮島、備後の鞆ノ浦・仙酔島・阿伏兎観音・尾道が遊覧先として現れる。同書（昭和5年版）「瀬戸内海名所巡り」（東京から十日間）には、上記に道後温泉及び別府温泉が加わる。同書と前掲『瀬戸内海航路案内』（大正2年）を比較すると、瀬戸内海を巡る旅の目的地及び順路は極めて共通性があり、瀬戸内海における観光地巡りの旅は大正期にすでに定型化していた、と捉えることができる。

以下、本稿で取り上げた観光パンフレットの特徴を整理して、まとめとしたい。

「瀬戸内海図絵」(大阪商船、昭和6年)〈資料1〉は、昭和初期の瀬戸内海の航路及び観光名所を概観するのに好都合な絵地図である。本パンフレットには大阪別府線をはじめ六航路線の名勝地が記載されており、瀬戸内海における昭和初期の観光地は、大正初期の観光地とほぼ重なっていることが判明する。また、船から降りて別府で温泉に浸かり、そこから汽車に乗り換えれば、鹿児島や熊本方面はその日のうちに着く、と宣伝する。景勝地として名高い耶馬溪や、間もなくに国立公園に指定される阿蘇山、霧島等は、瀬戸内海の船旅で向かう観光地であったことも読み取れる。

「遊覧日程と費用」(大阪商船、昭和10年)〈資料2〉は、瀬戸内海国立公園が指定された翌年に発行された、遊覧日程案15コースを掲載するパンフレットである。15コースは、瀬戸内海、九州、紀州と広域にまたがり、瀬戸内海では、国立公園瀬戸内海周遊、讃岐名所めぐり、道後入湯、別府入湯、鞆遊覧、宮島別府遊覧が示されている。この中で、讃岐名所めぐり、道後入湯、鞆遊覧は、阪神出発の場合は一日の休暇をはさんで前夜出発、二泊とも船中宿泊で、休暇の翌朝に帰着できる経済的かつ手ごろな旅であった。京阪神の都市住民にとって、瀬戸内海沿岸の名所旧跡は、恰好の遊覧場所であったことが読み取れる。

「讃岐遊覧案内」(大阪商船、昭和9年)〈資料3〉は、栗林公園、屋島、金刀比羅宮をはじめ讃岐の名所を広く紹介したものである。阪神から大阪商船の多度津線に乗って多度津に上陸し、電車で琴平、栗林公園、屋島に遊び、高松から乗船して阪神に帰着する「讃岐巡り」の旅が示されている。讃岐巡りに際し、船車連絡の割引切符「讃岐遊覧券」が発売されていた。また、遊覧券と併せて食事券も販売するなど、さまざまな工夫を凝らして讃岐巡りの旅を盛り上げようとしていた様子が伝わる。

讃岐に観光客を誘致しようと、高松市観光課も独自にパンフレットを作成している。「高松と琴平」(昭和9年以降)〈資料4〉、「鬼ヶ島」(昭和12年以降)〈資料5〉である。前者は、「讃岐遊覧案内」〈資料3〉に比べると、地元目線である点が特徴であろう。後者は、桃太郎伝説を中心に紹介するパンフレットである。高松沖に浮かぶ女木島の洞窟は、昭和6年に「鬼ヶ島」と名づけ公開された。この「鬼ヶ島」は、まさに昭和初期に創設された新興観光地であり、市役所も勢いに乗って躊躇なくパンフレットを発行して積極的に宣伝に努めた姿が伝わる。

「道後と松山」(大阪商船、昭和9年)〈資料6〉は、道後温泉をはじめ松山城、面河溪、石鎚山、来島海峡、大山祇神社等、伊予の名所を紹介したパンフレットで、伊予の風光の魅力を簡潔に伝えている。

「別府へ」(大阪商船、昭和12年)〈資料7〉は、別府とその近郊の遊覧地はもとより、別府を起点として巡る九州各地の遊覧地を紹介するパンフレットである。別府には大正末年から昭和にかけて、鶴見園、ケーブル遊園(乙原遊園)が開業する。大正15年2月に開園した鶴見園は、大浴場・温泉プール・各種娯楽設備・歌劇場を備えた別府随一の集客施設であった。またケーブル遊園は、昭和4年に開園した展望温泉を備えた施設である。昭和5年にはゴルフリン



クスも開場し、昭和初期の別府は娯楽地としての性格を強めていく。

別府の観光を特色づけるものに「地獄巡り」が挙げられる。『瀬戸内海航路案内』（大正2年）には、すでにその名が現れ、大正6年に九州自動車がハイヤーを用いた地獄巡りを開始するが、道路が未整備であった。大正10年に地獄循環道路（県道）がようやく整備された。昭和3年には亀の井自動車株式会社による地獄めぐり25人乗バス運行が開始され、便数も著しく増えた。昭和2年、別府は「日本新八景」温泉部門第一位に入選するが、その前後では別府観光の様相が様変わりしていたことが各種旅行案内書やパンフレットの検討から読み取ることができる。

各種パンフレットから、瀬戸内海沿岸の風光明媚な名所旧跡が遊覧地として登場し、それらを巡るさまざまな船旅が提示されていた様子を知ることができる。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、藤井務氏（1916～2003）の旧蔵コレクション資料を寄贈いただくとともに、関係資料の提供・ご助言をいただいた安藤典子氏に御礼申し上げる。また、本稿は、愛知淑徳大学研究助成「自然公園を対象とする観光文化に関する基礎的研究（No18TT26）」（平成30～31年度）の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として本稿で取り上げた瀬戸内海の観光資源の現況を見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げます。

## 注

- 1 谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（1）日光・箱根—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」（『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第10号、2018年、所収）。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（2）富士・箱根—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」（『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第8号、2018年、所収）。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（3）東京近郊—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」（『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第11号、2019年、所収）。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察（4）信越—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」（『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第9号、2019年、所収）。
- 2 藤井務氏は、昭和13年（1938）にジャパン・ツーリスト・ビューローに就職し、昭和21年（1946）の復員後、昭和54年（1979）まで日本交通公社に勤務された方である。日本交通公社の文化課長、調査部次長を経て、公社関連の琉球総合開発株式会社の常務取締役となって沖縄の本土復帰直後の沖縄ハーバービューホテルの運営に当られた。後に創立にかかわった日本ユースホステル協会の理事長に就任している。同氏は若い時から地理や旅行が好きで、入社するまでにほぼ全国を旅行し、各地の山などにも精力的に登っており、戦前から、行く先々で観光パンフレットを入手していた。
- 3 原田和作『大阪商船株式会社航路案内』駸々堂、明治36年
- 4 国内四航路とは、瀬戸内海・南海・九州・山陰の各航路。
- 5 国外五航路とは、台湾・南清・韓国・揚子江・北清の五航路。
- 6 大阪商船株式会社『瀬戸内海航路案内』、大正2年

- 7 前掲6、p4
- 8 前掲6、p4～5
- 9 前掲6、p140～142
- 10 前掲6、p125
- 11 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』大正9年、p53～56
- 12 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』昭和5年、p452～463
- 13 昭和5年当時、列車の所要時間は東京―神戸間11時間30分（急行）、宮島―東京間19時間（急行）であった。また、船の所要時間は、神戸―高松間5時間半、高松―坂手（小豆島）間1時間半、坂手―多度津間4時間、高浜―別府間5時間半、別府―宮島間8時間半であった。
- 14 下りは大阪～神戸～高松～今治～高浜～別府である。上りは別府から大分に寄港して同じルートをたどった。下りの昼便は大阪を午後二時に出帆し、翌日午前十時に別府に到着する。晩便は午後八時二十分の出帆で、午後三時に別府到着である。また、上りの昼便は午後〇時半に別府を出帆、翌日午前八時十分大阪着、晩便は午後六時半別府出帆、翌日午後一時大阪到着である。
- 15 他の四隻は、かつて阪神別府間の観光航路に華々しく登場した紅丸の二代目（大正13年進水）、そしてやや古い紫丸（大正10年進水）・屋島丸（大正4年進水）である。
- 16 日本観光文化研究所編『金毘羅庶民信仰資料集』（一）～（三）金刀比羅宮社務所、昭和57～59年。松原秀明撰『金毘羅庶民信仰資料集』年表篇、金刀比羅宮社務所、昭和63年
- 17 延享元年（1744）、大坂から丸亀への金毘羅参詣船開設願いが大坂の船宿多田屋からお山（金毘羅当局）に出されて間もなく許可される。それは金毘羅参りが盛んになる時期を象徴する出来事と言えよう。
- 18 下津井背後に瑜伽山蓮台寺があり、金毘羅参詣客が足を伸ばして立ち寄るところであった。
- 19 明治22年、「大日本帝国水難共済会」が金刀比羅宮の尽力で設立され、これが国家的事業へ発展。
- 20 『旅程と費用概算』（昭和5年）「屋島と琴平遊覧」（大阪から三日）では、往路の大阪高松間、復路の多度津大阪間はいずれも大阪商船利用の旅程が組まれている。
- 21 瀬戸内海国立公園は、戦後、和歌山県から大分県に至る陸域主要部が追加指定となり、さらに六甲山、国東半島などが加わり、今日では1府10県の広域に公園範囲が拡張された。
- 22 ほぼ同時期の昭和5年、愛知県犬山郊外の栗栖において川治宗一が桃太郎神社創設を企て内務省に願ひ出、一旦は却下されたものの御札を発行しないことを条件に認可されるや、当人は初代宮司になってしまったといった珍事もあった。
- 23 高浜は、松山へ電車で25分、道後へ40分の伊予の関門となる港町で、前面に伊予小富士と呼ばれる興居島を控える風光明媚な街である、と紹介されている。
- 24 三津は、高浜が開けるまで松山の門戸として賑わったところで、今も漁港として繁栄し、江戸初期から行われていた三津の朝市（魚市場）の名は天下に聞こえている、と紹介されている。
- 25 松山市は、市の中央に松山城が聳え立ち、市中は商工業の中心地として活気にあふれている、と紹介されている。
- 26 鉄道省『日本案内記中国・四国篇』昭和9年、p387～388
- 27 高浜虚子「別府温泉」（『日本八景』平凡社、2005年、所収、P182）
- 28 宮本常一『民俗学の旅』講談社、1993年、p52
- 29 前掲6、p66
- 30 大阪商船が「別府へ」と同時期の昭和12年に発行したパンフレットで手元にあるものは「船で南紀へ」「沖縄へ」「台湾中心航路案内」「西貢盤谷航路案内」の四種類である。
- 31 戦前、外貨獲得を目的に構想された「国際観光ルート」は、上海～長崎～雲仙～阿蘇～別府～瀬戸内海～阪神。三つの国立公園を巡るルートである。
- 32 昭和6年当時本航路に使用されていた五隻のうち緑丸・屋島丸は沈没したため、使われていない。
- 33 鉄道省『日本案内記九州篇』昭和10年、の記載には「【別府温泉】一昼夜の湧出量十五万石を超える。旅客延べ人員は昭和五年に約四十六万人、翌六年は約三十九万人」とあり、本パンフレットとの間に大きな数値の隔たりがあることを指摘しておく。

34 前掲 6、p 123

35 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』大正 15 年、p 212～215

36 前掲 12、p 480～484

37 鉄道省『鉄道旅行案内』大正 13 年、p 209～210